

氏名(本籍)	小笠原 春香 (神奈川県)		
学位の種類	博士(歴史学)		
学位記番号	博歴甲第4号		
学位授与の日付	平成27年3月25日		
学位授与の要件	学位規程第5条第1項該当		
学位論文題目	戦国大名武田氏の外交と権力		
論文審査員	主査 駒澤大学教授	文学博士	久保田昌希
	副査 駒澤大学教授	博士(歴史学)	湯浅 隆
	副査 駒澤大学教授	博士(日本史学)	中野 達哉
	副査 日本女子大学教授	文学博士	永村 眞

## 論文内容の要旨

戦国大名は、中世後期から日本各地に存在し、時に周辺勢力との抗争を展開することでその領国を維持していた。戦国大名が領国を維持・拡大させるにあたり、対外勢力との戦争をたびたび繰り返したことは周知の事実である。そして、戦争は大名が対外勢力と接する機会を生み出し、その中で停戦や和睦、あるいは軍事協力を目的とした同盟の成立など、近代国家間の外交さながらの対外交渉が大名間でも行われた。

1980年代以降、戦国大名は自立した地域権力として位置づけられ、大名が支配する領国を「国家」と捉える見解が示された。さらに、個別大名研究が大いに進展したことによって、大名の軍事行動や外交の推移が次々と明らかにされるに至ったが、個別大名の政治動向を整理することに終始する傾向が強まった。戦争・外交は、複数の大名との間で展開されるものであり、周辺の政治情勢の変化とも密接に関わるものである。よって、大名がなぜ戦争・外交を行ったのかを明らかにするためには、多角的な見地から大名間の戦争・外交を考察する必要がある。また、大名の外交相手は大名に限らない。大名領国の境目に存立していた国衆をはじめとして、時には将軍や寺院勢力と外交上の接点を持つこともあった。こうした外交相手の多様さも、大名の戦争・外交を明らかにする上で、考慮しなければならない点である。

本論では、甲斐武田氏を事例として、戦国大名の戦争・外交の実体について明らかにするとともに、なぜ地域権力たる大名が対外戦争を展開する必要があったのか、検討を行うことを目的としている。武田氏は、もともと室町期守護であるとともに、戦国大名へ発展してからは、将軍との友好関係を保持しながら、甲斐を拠点として対外戦争を展開し、領国を拡大した経緯がある。武田氏が守護から戦国大名へと転じる中で、将軍との関係にいかなる変化が生じたのかを検証することで、守護と戦国大名の権力の特質にどのような差があるのか、考察を試みた。

また、武田氏の外交・権力を検討する上で欠かすことができないのが、畿内を制圧して権力を増大させた織田信長との関係である。信長が將軍足利義昭を奉じて上洛し、畿内で勢力を伸ばした背景には、武田氏との同盟が存在していた。しかし、この同盟は信玄が死去する直前に崩壊し、両氏の敵対は武田氏が滅亡するまで続いた。武田氏は、最終的に織田氏によって滅ぼされていることから、武田氏が領国を後退させていく過程を明らかにするためにも、武田・織田間の外交関係は重視すべき問題である。このような観点から、本論では武田・織田間の外交関係に注目した。

また、戦国期で戦争が起きる要因として、大名領国の境目に存立した国衆に着目し、東美濃遠山氏と高天神城小笠原氏を取り上げた。遠山氏と小笠原氏は、それぞれ織田氏と徳川氏と関係の深い国衆であり、武田氏と織田・徳川氏の外交関係を検証する上でも不可欠の存在である。そして、戦争・外交の視点から相対的に大名と国衆・土豪を比較した場合、地域支配権力としての性質に異なる差があるのか、武田氏と遠山・小笠原氏の関係を事例として考察し、大名権力の特質について論じた。

第1章「武田信虎と今川・北条氏」では、武田信虎が家中の内訌を治めて甲斐を統一し、国外へ侵出していく過程を整理し、信虎が積極的な対外戦争を展開した要因に迫った。また、今川・北条両氏からの軍事介入に対応する信虎の動向を明らかにし、武田氏が戦国大名へと発展していく中で、なぜ軍事が優先されたのか、その理由について考察を行った。

第2章「戦国期の武家女性と大名の外交・同盟 — 甲相駿三国同盟を中心に —」は、女性史研究が畿内や西国を中心に進められている現状をふまえ、三国同盟を主題とし、女性が他家に嫁ぐことで期待された政治的な有効性、外交上で果たされた女性の役割について検討を行った。あわせて、大名の外交における婚姻の意義についても私見を述べた。

第3章「武田氏の外交と石山本願寺」は、信虎・証如の代より交流があった武田・本願寺間の外交関係を整理し、両者の関係が軍事同盟へと転じていく過程を論じた。多くの大名が一向一揆への対応に苦慮する中、一貫して武田氏が本願寺と友好関係を維持できたのは何故か、その要因について、織田信長の存在に注目しながら検討を行っている。

第4章「武田・織田同盟の成立と足利義昭」では、武田・織田同盟の成立過程を明らかにするとともに、両氏が何を目的として足利義昭に友好的な態度を示したのか、検討を行った。そして、武田氏と義昭の関係を分析することにより、室町期の幕府守護体制とは異なる自立した地域権力として、大名が將軍との外交を展開していた点を指摘している。

第5章「武田氏の駿河侵攻と徳川氏」は、武田・徳川両氏が今川領国を挟撃するにあたり、どのような交渉を行い、軍事行動に至ったのか、事実関係を整理した。その中で、両氏の認識に違いがあったことを指摘し、大名同士の軍事協力の実情に迫った。また、武田氏が徳川氏の軍事協力を得るために織田氏に仲介を頼んでいた経緯にも着目している。

第6章「武田氏の小田原侵攻と三増合戦」は、一次史料と『甲陽軍鑑』の記述を比較検討しながら、武田氏の軍事行動を分析し、武田氏が駿河制圧を達成するにあたり、小田原侵攻が戦術面でどのような意味を持つのか、検討を行った。付論では、武田軍の進軍経路を追い、武田軍が村落や民衆に与えた被害について、明らかにしている。

第7章「長篠合戦試論 — 長島一向一揆との関連から —」は、近年研究の進展が著しい長篠合戦について、武田軍が敗北した要因を明らかにすべく、武田氏と長島一向一揆との同盟関係に焦点を当て、両者の同盟が織田信長に与えた影響について試論を述べている。

第8章「駿遠国境における武田・徳川間の攻防」は、長篠合戦後に駿遠国境で展開された武田・徳川間の軍事衝突について、『家忠日記』の記述を中心に検討を行った。信康事件や御館の乱といった他大名の家中で起きた事件に関わる武田氏の動向や、北条・徳川同盟の成立過程についても言及している。

第9章「武田氏の東美濃攻略と遠山氏」は、武田・織田領国に挟まれた状態で存立していた東美濃の国衆遠山氏に着目し、遠山氏が武田・織田同盟成立の介在となっていた点や、両属の立場を維持して領域支配を行っていた点などを指摘し、国衆が大名間の同盟に深く関与していた点を追究している。

第10章「武田・織田間の抗争と東美濃 — 元亀・天正年間を中心に —」は、大名間の戦争が、国衆の帰属をめぐるものであったことを示す事例として遠山氏に着目し、武田・織田両氏による東美濃への軍事介入の実態について明らかにした。さらに、天正年間における東美濃をめぐる武田・織田両軍の軍事行動についても、その経過をまとめている。

第11章「武田氏の戦争と境目国衆 — 高天神城小笠原氏を中心に —」は、徳川氏から武田氏に離反した小笠原氏に着目し、大名の軍事介入によって国衆の家中やその同心たちが内部分裂を起こしていたことを明らかにした。また、小笠原信興の転封を取り上げ、国衆が持つ自立性を大名が警戒し、境目の防衛強化に努めていた点を指摘している。

以上の検討をふまえ、終章では、戦国大名がなぜ、常に戦争状態に置かれながら外交を展開しなければならなかったのか、その要因について私見を述べた。

戦国大名は、将軍からの上意に左右されない守護とは異なる権力であるとともに、対外戦争を積極的に展開することで家中や国衆をはじめとする地域領主の支持を集め、領国支配を推進していた権力、いわば国家の支配者であると位置づけた。そして、大名は恒常的な戦争状態の中で、将軍・大名・寺院・国衆といったあらゆる勢力と外交を行ったが、こうした外交が展開できたのは、大名が地方に分立していた国家を支配する権力であったからであり、外交権の行使は大名権力の一つであると捉えた。大名が常に戦争状態に置かれ、外交を展開しなければならなかった要因として、本来ならば各地の戦争を停止・抑止しなければならないはずの将軍が、戦国期では権威を失墜していた点を挙げた。将軍の停戦令がなくとも、大名は自発的に外交を駆使して戦争を回避しており、大名権力の一端を見ることができるとは。しかし、大名には将軍のように全国の戦争を停止あるいは抑止するほどの権力はなかったため、戦国期は各地で戦争状態となっていたのである。

そのような中、勢力を拡大して和睦調停を行う権力を有したのが織田氏であった。しかし、信長はかつての同盟者である武田氏からの和睦には応じず、最終的には滅亡させた。この信長の意図は、武田領国を解体して織田領国に組み込むことで、東国の大名・国衆に対して自らの権威を示し、彼らに降伏を要求しようとしたからであるとした。

東国において、甲斐を本拠として領国を拡大し、周辺勢力に対し多大な影響力を有した武田氏は、

他大名や国衆と戦争・外交を繰り返すことで、その権力を維持してきた。国家を支配する大名は、將軍の停戦令が絶対的でなかった状況下で独自に外交権を有し、内外にその権力を浸透させるために戦争を展開した。武田氏の戦争・外交は、まさに室町期守護から戦国大名へと発展した地域国家の支配権力による、独自の政治的手段の典型であったと位置づけることができる。しかし、領国拡大の途上で、將軍に代わる、大名間の戦争を停止・抑止する強大な軍事力を持つ権力として織田氏が台頭し、その潮流の中で武田氏は滅亡の一途を辿ったのである。武田氏の滅亡は、中世から近世へ移行する一つの象徴的事象であり、のちの秀吉による小田原征伐も、その延長線上にあったと結論づけた。

## 論文審査結果の要旨

### I、はじめに一研究の観点と構成

日本史上における16世紀は、室町幕府が存在しながらも列島各地に戦国大名が登場し、独自の領国を形成、相互に抗争をくり返した時代である。かつては「群雄割拠」とか「群雄の争覇」などと表現され、また桶狭間や川中島、そして長篠などの合戦がその時代のシンボリックな事象として理解されていた。それらは現在においても「合戦譚」としてつきることはないが、一方で近年の戦国史研究は15世紀後半から17世紀前半を固有の時代、すなわち「中近世移行期」研究として、戦国社会をめぐるさまざまな観点により、これまでの研究が見直されてきている。とくに東日本地域における戦国大名研究では北条氏に加えて武田氏をめぐる研究が活発であり、戦国史研究会や武田氏研究会における成果にはめざましいものがあるといえよう。

そうした研究状況のなか、本論文「戦国大名武田氏の外交と権力」は、学位申請者（以下「論者」と表記）が、武田氏の興亡を事例に、他勢力との戦争を基軸としながら戦国大名として行った広範な外交について、単なる「大名興亡論」にとどめず、むしろ「外交」戦術・戦略の視点から戦国社会史・戦国大名研究として深化させている。さらにその上に立って戦国大名とは何か、それと関わって織田権力から豊臣政権段階（中近世移行期）を見通していこうという意欲的なものである。

構成は序章、3部11章、付論1、終章からなり、原稿用紙（400字）に換算すると、800枚を超えるが、こうした研究には史料の博搜が欠かせない。論者は関連史料を広く収集し、丹念に読み解き史実を発見して積み上げていくという作業により、ここに研究をまとめたことも記しておきたい。

本論の構成はつぎのようになっている。

序章 戦国大名の戦争・外交に関する研究と課題

1 戦国大名の戦争・外交に関する研究状況、2 武田氏研究における戦争・外交

3 本論の視角と課題

第1部 大名間の外交・同盟

第1章 武田信虎と今川・北条氏

1 武田氏の内訌と信虎の家督相続 2 信虎の甲斐統一 3 武田氏の国外侵出

4 花蔵の乱と武田氏 5 信虎の駿河追放と河東一乱

- 第2章 戦国期の武家女性と大名の外交・同盟—甲相駿三国同盟を中心に—
  - 1 甲駿同盟の継続 2 三国同盟の成立 3 甲相同盟と甲駿同盟の推移
  - 4 三国同盟の崩壊
- 第3章 武田氏の外交と石山本願寺
  - 1 武田・長尾間の抗争と本願寺 2 武田・本願寺同盟と織田信長
  - 3 武田氏と長島一向一揆 4 長篠合戦以降の武田・本願寺同盟
- 第4章 武田・織田同盟の成立と足利義昭
  - 1 東美濃における遠山氏の動向と武田・織田同盟の成立
  - 2 足利義昭の入洛と武田氏の駿河侵攻 3 武田氏の徳川領国侵攻と織田氏
- 第2部 大名間の戦争
- 第5章 武田氏の駿河侵攻と徳川氏
  - 1 武田・徳川間の交渉と織田氏 2 武田・北条間の攻防と武田氏の外交
  - 3 懸川城の開城と徳川氏
- 第6章 武田氏の小田原侵攻と三増合戦
  - 1 駿河をめぐる攻防と武田氏の小田原侵攻 2 三増合戦
  - 3 武田氏の駿河制圧と甲相同盟の成立
  - 付論 武田氏の小田原侵攻における放火と進軍経路
- 第7章 長篠合戦試論—長島一向一揆との関連から—
  - 1 武田氏と長島一向一揆 2 長篠敗戦の要因 3 駿遠国境戦への転換
- 第8章 駿遠国境における武田・徳川間の攻防
  - 1 武田・徳川間の対立と信康事件 2 徳川・北条同盟の成立と武田勝頼の外交
  - 3 高天神城攻防戦と織田信長
- 第3部 大名間の戦争と国衆
- 第9章 武田氏の東美濃攻略と遠山氏
  - 1 武田氏の信濃侵攻と遠山氏 2 武田氏の飛騨侵攻と遠山氏
  - 3 武田・織田間の対立と東美濃の情勢
- 第10章 武田・織田間の抗争と東美濃—元亀・天正年間を中心に—
  - 1 元亀年間の美濃と岩村城 2 郡上遠藤氏の動向
  - 3 秋山虎繁の岩村入城と織田氏の侵攻
- 第11章 武田氏の戦争と境目国衆—高天神城小笠原氏を中心に—
  - 1 武田勝頼の高天神城包囲 2 帰属先をめぐる小笠原家中の分裂
  - 3 同心本間氏の動向 4 小笠原信興の転封
- 終章 戦国大名の外交と権力—甲斐武田氏を事例として—
  - 1 武田氏の戦争・外交
  - (1) 信虎期の戦争・外交 (2) 信玄期の戦争・外交 (3) 勝頼期の戦争・外交

## II、論文の内容と評価

以下、論文の内容と評価について紹介する（以下、各戦国大名の名は時期により変化することがあるが、最も知られている名で表記する）。

序論「戦国大名の戦争・外交に関する研究と課題」では、はじめに研究状況について、戦前における渡邊世祐から戦後の高柳光壽へと続く展開を紹介・評価し、以降戦国大名間の和睦や同盟という観点が生ずるとした。そして、現在における戦国大名国家論と戦国期守護論を紹介し、とくに1980年代以降、提起・展開されている「国郡境目相論」すなわち戦国大名間の戦争を領土紛争とする議論のなかで、藤木久志氏が戦国大名の同盟を攻守軍事協定・相互不可侵協定・領土協定・縁組みとした研究に注目する。そしてそれと関わって提起されたさまざまな論点を整理する中で、和睦や同盟という戦国大名間の戦争防止機能はもちろんのこと、室町將軍の役割や領国境目における国衆の存在にも着目すべきとする。これらが本論における論者の基軸とする観点であり、こうした多角的な見地から戦国期の戦争を明らかにして、当該社会の展開のなかに位置づける必要があるという。その有効な具体的事例となり得るのが戦国大名武田氏であり、その戦争の推移と外交の実態を明らかにするとともに、戦国大名がなぜ対外戦争を展開する必要があったのかを検討することを目的にしたいとする。

続いて武田氏三代（信虎・信玄・勝頼）における戦争・外交をめぐる研究史を整理・紹介し、武田氏は守護から戦国大名に転化するが、それは対外戦争を繰り返して領国を維持拡大していくことで実現し、内政と軍事外交が表裏一体で進められることを指摘する。また織田信長との関係の重要性も指摘し、その展開の成否の如何は以後の戦国社会の展開に大きく影響することから、両者相互の外交は重視すべき問題とする。これらの研究史整理と基軸となる観点の設定は適切である。

第1部「大名間の外交・同盟」は4章からなる。

第1章「武田信虎と今川・北条氏」では、信虎が15世紀後半から16世紀はじめにかけて、一族の内訌を収束し、ついで国内の有力国衆を服属させて甲斐統一を図るが、その過程をふくめて、領国は常に国外勢力である今川氏や北条氏による軍事介入を受けていたとする。それは一族間の対立とも関わって、複雑な勢力対抗をみせるが、信虎は国内有力国衆にたいして軍事的圧力をかけて降伏を促しつつ、婚姻関係をもって関係を強化し甲斐統一をはかったとする。それをもとに信虎は国外へ進出し、北条氏との抗争と一方では今川氏と和睦したが不安は払拭されず、新たに信濃佐久郡域への侵攻を開始したこともあり、ついで扇ヶ谷上杉氏との婚姻を画策したが、それは逆に今川・北条氏の攻勢をうけることとなり、信虎の外交は危機に陥ったとする。

その後信虎は、今川氏の内訌（花蔵の乱）において義元を支持し、以後婚姻を通じて両者の関係を好転させるが、一方で北条氏は今川氏との婚姻関係をもとに内訌への過剰な干渉により、かえって両者は対立を深めたとし（河東一乱）、婚姻による結びつきが時には双方の思惑違いを生ずるとした。なお甲斐同盟の成立は、やがて信虎・信玄双方を支持する家中の軋轢を生み出し、天文10（1541）年に信虎追放となるが、信玄は親今川路線を変更せず、その後の今川・北条間の和談を仲介しているが、

そこにその後の甲駿相三国同盟への連続性を指摘している。

本章は、内訌に苦戦していた信虎が、軍事とともに国内外の諸勢力と外交のバランスを取りながら甲斐統一を実現していく過程を丹念に活写している点は評価できる。しかし、花蔵の乱における信虎による義元支持への根拠が示されておらず、また甲斐統一をはたした信虎がなぜ追放されたのか、家中の対立ということのみではなく、加えて軍事と外交のバランスという観点からの説明がほしいところである。

第2章「戦国期の武家女性と大名の外交・同盟—甲相駿三国同盟を中心に—」では、いわゆる三国同盟の成立と崩壊について、とくに女性史の観点から取り組んだ意欲的な内容である。ここでは近年の戦国女性史の議論をふまえ、戦国期の武家女性を政略結婚の犠牲と考えるのではなく、「大名間の和睦交渉における使者、あるいは外交官のような役割」としてとらえることを前提に、大名間の和睦・同盟における女性の役割と婚姻がもたらす政治的効果について論じている。

ここで登場する女性は武田信虎女（定恵院殿＝今川義元室）・今川義元女（嶺松院殿＝武田義信室）、武田信玄女（黄梅院殿＝北条氏政室）、北条氏康女（蔵春院殿＝早川殿＝今川氏真室）であり、とくに嶺松院殿、黄梅院殿、早川殿について、三国同盟との関わりを追っている。そこでは婚姻に至る経過としての大名使者の派遣による打ち合わせ、起請文の提出などがあり、周到なる準備のもとに話が進められているとする。

輿入れの際には、いずれの場合も豪華な行列を仕立て行われたことを紹介しているが、行列の出迎えがどこで行われているかという点に注目し、黄梅院殿は上野原で北条方の出迎えをうけ、また嶺松院殿は武田方が駿府まで出迎えており、それは婚姻に至るまでの相互の信頼関係にあるとする。その点で黄梅院殿の行列が、とくに豪華であるのは武田・北条関係の友好度は、今川・武田の関係よりも低かったことの結果とみている。なお早川殿の引き渡しも伊豆三島付近で、今川・北条の領国境であることを考えると、黄梅院殿の場合と同じ国境であり、これも今川・北条が河東一乱での敵対したという経緯が、そうさせたのではないかとする。大事な指摘であろう。さらに黄梅院殿の出産と関わって、信玄は河口湖関所を撤廃しているが、これも武田氏にとって、両家の間における子の誕生は血縁関係を生ずるという意味で大事な意味をもつ故と指摘する。

永禄後期、今川・武田の関係は悪化しはじめ、嶺松院殿は駿河帰国となるが、その折り信玄は今川からの誓詞を提出させている。これを論者は信玄の同盟継続意思の確認行為とし、女性が大名間の外交を左右する極めて重要な存在としている。また、今川氏が駿府を逐われる際、早川殿は輿に乗れずに駿府から懸川へ移ったが、これを知った父親の北条氏康は、それを上杉謙信に伝えて憤っているが、これもその後の北条・武田間の対立要因と指摘している。北条・武田間の関係悪化により黄梅院殿は甲斐に帰され没するが、両氏の関係が復活すると、箱根早雲寺境内に塔頭黄梅院が建立されており、それは夫北条氏政が黄梅院殿をあくまでも正室と扱っていたからとし、やはり同盟と関わった女性の重要性を指摘している。

こうした事例の積み上げにより、武家女性が他家に嫁ぐことで同盟が強化されるが、外交関係が悪化すると離縁させられる可能性をも多分に含んでおり、女性はそれを理解した上で他家に嫁いでいっ

たとする。

本章の「おわりに」では、こうした武家女性の実態を政治の犠牲と悲劇的に捉えたり、逆に外交で活躍したと過大に評価することを戒め、改めて大名の外交における婚姻の有効性や弊害を検討すべきと冷静に指摘する。今後の戦国女性史研究への「まなざし」として注目しえよう。

第3章「武田氏の外交と石山本願寺」は、武田氏の外交・戦争に関する研究の多くが、東国を中心とするなかで、じつは石山本願寺や一向一揆とも大きく関わっていることを示唆するものである。そもそも信玄の室三条氏の妹は、本願寺宗主顕如の正室であり、両者は義兄弟として良好な関係にあったとする。武田氏にとってそれが軍事的な効力を発揮したのは对上杉謙信との抗争であり、それへの牽制のためやがて越中一向一揆との連携を画策し、本願寺にとっても加賀一向一揆が上杉氏の攻勢を受け、その危機から回復するために武田氏を必要とし、両者間の関係は軍事協定の要素を強めていったとし、これは戦国大名相互の軍事協定と差のないものであったとする。

そしてその要因を武田・本願寺間の長期友好関係によるとしている。この点、論者はふれていないが、はたして信玄室と顕如室が姉妹であることのみ要因に因るのかが気になるところである。また信玄が信長と友好関係にあったことにふれ、元亀元（1570）年に石山合戦が開始することで、武田氏も影響を受けることになるが、武田氏にとって本願寺との関係は美濃国衆や朝倉氏との連携する上で重要であったとする。なお信玄の遠江侵攻は本願寺との同盟関係により実行されたと指摘し、それは織田信長と敵対する勢力との連携を前提として決行されたとした。

したがって本願寺も織田氏との敵対に際し武田氏に一層期待を寄せざるを得ず、それは朝倉・浅井氏の不首尾によって武田氏が全面的に対応せざるをえなくなり、それが後の武田氏を窮地に追い込むことになったとした。そして本願寺との同盟は信玄の没後、勝頼の代にも継続し、協力体制はむしろ強化されていき、本願寺と織田信長の一時的な和睦をはさみ、伊勢長島一向一揆との関わりをもつに至るとした。

なお論者によれば武田氏は長島一向一揆の中心たる願証寺との関係が深く、婚姻関係も予定されていたとするが、この関わりのもち方があまり明確ではないのが惜まれる。一方、武田氏は遠江高天神城を攻略し勢力下に組み込んでいくが、それにより形勢不利となった織田信長は長島一向一揆を殲滅したため、武田氏をめぐる戦況が厳しくなってくるとみている。

そして天正3（1575）年の長篠合戦で武田氏は敗北するが、翌年本願寺による再度の挙兵があり、さらに將軍足利義昭による上杉氏と武田・北条・本願寺の和睦要請をへて、武田氏はついには中国毛利氏と同盟することになる。

本章では、こうした反織田・徳川体制の構築と武田氏の動きが併記されており、政治動向の中心に武田氏がいたことは想定される。したがって論者が指摘する毛利・大友への和睦勸奨からしても、この時期の武田氏の広範な外交展開として、ここはもう少し叙述を広げた方がよかったと思われる。

また信玄を継いだ勝頼の外交努力は、これまでの一般的な勝頼像を払拭する。この点も新たな観点の提示として評価される。そして、織田信長に対する軍事・外交の主導権はじつは武田氏と本願寺にあったということが理解され、論者が武田氏を事例とした意図は成功していよう。



そして天正8(1580)年に石山戦争が終結することで、武田氏は畿内における軍事協力者を失い、窮地に追い込まれ2年後に滅亡するが、その遠因をさぐるなら長篠合戦敗北よりも、むしろ伊勢長島の一向一揆の殲滅を契機とせるという理解は、新知見として評価されよう。

第4章「武田・織田同盟の成立と足利義昭」は武田氏が戦況を優位に進めるために、東国のみでなく、あらゆる大名と同盟関係を結んだとし、勢力の西進によって尾張織田氏や三河徳川氏および足利義昭との外交接点に関する観点も必要とし、本章を設定している。

織田氏に対しては武田氏が今川領国を視野に入れる中で同盟が成立し、侵攻の進捗とともに徳川氏と敵対するに至るが、織田氏との本格的な接点は永禄7(1564)年であり、信玄が飛騨侵攻に際し東美濃への影響、また織田氏は美濃斎藤氏との抗争中という状況にあったとし、とくに東美濃の遠山氏による武田・織田両氏への好誼のもつ意味が大きかったとした。

一方信玄の侵攻をうけた飛騨地方では内乱状態となり、その牽制のために上杉氏は信濃南下を意図、それが第5次川中島合戦を惹起したとする。さらに織田氏は上杉氏との外交交渉を活発化させ、それらの動きに幕府再興を企てる足利義昭も加わって諸勢力に協力を求めたことで、様相は複雑化していくとしている。その後にさきの遠山氏をめくり、武田・織田両氏による調略をへて、両者対立の危機に至るが遠山氏を据えた婚姻関係により軍事衝突が避けられたとした。この点について、論者は指摘していないが、戦国期におけるいわば境界領域における「平和のシステム」を提唱できそうである、検討してほしい。

武田・織田同盟について論者は、信玄による駿河侵攻と信長の足利義昭推戴・上洛とは、双方の合意があり、両氏が相互不可侵を約していたことによるとする。この指摘も注目されるが、信長上洛の成功はともかく、義昭政権の誕生は間接的には信玄の尽力でもあるという指摘には、なお慎重が必要であろう。

また信玄の駿河侵攻については、信長による家康への仲介があり、それは信長と家康とが同盟関係にあったが故とする。しかし信玄と家康による今川領国分割如何は、相互の目論見により容易ではなく、さらに信玄は、北条氏による軍事的対応により苦境に立たされるとする。信玄はその上でさらなる外交を展開するが、その一つが对上杉との停戦(和与)であり、また信長を通じて家康への北条氏牽制の要請であったとする。そして信玄は北条氏への陽動作戦を展開しつつ、その過程で東三河国衆との関係を構築していったとする。

その後信玄は、三河・遠江(徳川領国)へ侵攻するが、それは武田・織田同盟破棄の問題とも関わってくるが、この点で信玄と信長との対立は、信玄の遠江侵攻した年次を近年の研究成果にもとづき元亀3(1572)年としている。こうして信玄と信長との対戦が迫ってくるが、論者は信玄は独断せずに朝倉・本願寺との連携による実行を考えていたと推測している。また義昭との関係について、信玄は謙信との停戦、信長との同盟、また信長と本願寺の和睦仲介という形で連携をしており、あくまでも戦況に応じて將軍との外交関係を有効活用していったと指摘している。総じて第1部は、信玄の軍事・外交につき研究史をふまえ、新たな見解を示しており、評価できる。

第2部「大名間の戦争」は4章付論1からなる。

第5章「武田氏の駿河侵攻と徳川氏」では、今川領国に侵攻した武田・徳川両氏の動向を整理し、両氏と同盟関係にあった織田氏に着目することで、合戦の背景にある諸氏の外交についての実態解明を試みている。本章の成果としては、これまでの研究では、信玄の駿河侵攻が織田信長との同盟関係を前提に行われたとする先行研究をふまえ、新たに織田信長が將軍足利義昭を奉じての上洛を実現させるために信玄と和睦し、信玄の今川領国侵攻を容認したことを明らかにしている点が評価できる。そして信玄による、今川氏真の対上杉外交に対する批判と義昭支援の名目により、信玄の駿河侵攻が実現したとする。本章では、信玄の駿河侵攻に視点を据えて述べ、上記のような位置づけを行っているが、徳川家康の動向についても関説し、家康の信玄への外交姿勢についても明らかにし、それと信玄・信長の外交を結びつけることが信玄の外交をより明確にすることになるのではないだろうか。

第6章「武田氏の小田原侵攻と三増合戦」では、武田信玄の小田原侵攻がもつ軍事的意義を考察し、また、その間に起きた三増合戦に焦点を当て、一連の武田氏の軍事行動が武田・北条間に与えた影響について検討しようとしたものである。そこでは、当初、駿河における戦況は北条氏側が優位であったが、武田氏の小田原侵攻により形勢が逆転し、その後武田氏は駿河での合戦で勝利を重ね、駿河を制圧したとする。小田原侵攻および三増合戦は、武田氏の陽動作戦であるとし、駿河制圧の布石となっただけでなく、その後の甲相同盟成立にも大きな影響を与えたとする。これまで研究が希薄であった小田原侵攻および三増合戦について、新たに位置づけた点が評価できる。

なお、付論では武田氏の小田原侵攻時、武田勢の進軍経路となった相模川渡河点周辺における様相について、とくに武田勢による放火の被害を紹介している。

第7章「長篠合戦試論—長島一向一揆との関連から—」では、長篠合戦前後の天正期に武田氏が置かれていた政治情勢の分析から、武田氏の長篠合戦敗戦の理由を探ろうとしたもので、それには長島一向一揆の存在が大きく関わっていたとし、長篠合戦の直前に織田信長と敵対していた長島一向一揆が敗れ壊滅したことで、信長の対武田氏への派兵が可能となったことが大きな影響を与えたとする。そして合戦（戦争）の勝敗が単に戦闘力にとどまるのではなく、対戦する両者がおかれた政治情勢が大きく関与していたことを指摘している。武田氏周辺にとどまらず政治情勢を大きく捉え、長篠合戦への評価に新たな一視点を提示したことは評価される。

第8章「駿遠国境における武田・徳川間の攻防」では、先行研究においても研究が多く、多様な視点から捉えられているが、そのなかであまり検討されることがなかった『家忠日記』の分析を中心に再検討しようとしたものである。そこでは、武田・徳川両氏の駿遠国境における合戦の推移や諸勢力との外交について考察している。そして、とくに徳川氏の北条氏との同盟成立という外交政策が、徳川氏による高天神城の戦いでの勝利へと結びつくと位置づけている。また、徳川氏が織田信長の監視下において武田氏と戦っていたことも確認している。『家忠日記』の叙述に視点を置き分析したものであるが、結論としては、大方のところ先行研究を踏まえたものにとどまっている。もう少し、外交と戦争を結びつけた叙述が求められるところである。

第3部「大名間の戦争と国衆」は3章からなる。

第9章「武田氏の東美濃攻略と遠山氏」では、戦国大名の領国境界に存在した国衆のありようを明

らかにしようとする。武田氏は、支配領域を拡大させるとともに、新しく服属させた領地の国衆や土豪らを帰属させていった。これらの他国衆は、先方衆と呼ばれた。

この章では、領国の西端にあたる美濃国恵那郡に本拠をおいた遠山氏を事例とし、他の戦国大名領国との緩衝地帯における国衆の動向を追っている。この地域は、西側に美濃国斎藤氏（のち、織田氏）の勢力の東端であり、他方で武田氏の西進に伴って、武田・斎藤両氏のせめぎ合う地帯となった。

遠山氏の有り様を示す史料は少なく、国衆としての勢力規模は鮮明にはならないが、それでも領内二ヶ所に城を構え、永禄七年の上杉氏信濃侵入にさいし信玄から「鉄放衆五十人、急速二加勢憑入候」ことを命じられているところから、遠山氏は東美濃の地にあつて、東西の両勢力それぞれへの従属、つまり両属の対応をとることで自らの存在を保持しようとし、永禄から元亀3年にかけて、武田・織田氏の間で同盟が結ばれていたが、これは遠山氏を介在として実現したと論じた。

本章において戦国大名領国が接する地域の有り様とは、戦国大名諸勢力の政治・軍事面における動向とともに、その地の国衆が大きな影響を与えることを指摘している点で評価できる。

第10章「武田・織田間の抗争と東美濃—元亀・天正年間を中心に—」は、第9章のテーマに関する元亀3年から天正年間における動向を明らかにしようとする。

そもそも、遠山氏と武田氏との接触は、天文24年まで遡ることができ、それは木曾氏を介して武田氏からの遠山氏への帰属を促すことから始まったが、この遠山氏は、織田氏との姻戚関係を結んでおり、のちにはこの関係の延長線上に武田氏との姻戚になっていくとし、元亀3年夏から秋にかけ、遠山氏兄弟が相次いで没したこと、またこの時点で武田・織田両氏のそれまでの関係が破綻していたことを承け、織田氏は居城の一つであった岩村城を攻略したとする。その事由として、織田氏との姻戚関係に基づく支配の正当性が持ち出されたが、この動きにたいし遠山氏側では、結果として武田氏への帰属を選択した。これが、武田・織田氏抗争の引き金になっていったとする。

ついで、この遠山氏の動向が周辺地域に与えた影響を、郡上に本拠をおいた国衆遠藤氏を取り上げて論じていく。遠藤氏は、当初は斎藤氏に服していたが、織田氏の勢力伸長に伴い同氏へ服属し、そののち石山本願寺の意向が、この地方にも及ぶと、これを契機に武田氏は介入を開始する。そこには、武田氏が遠江へ侵攻するにあたり、郡上の遠藤氏を自営に引き込む意図があったとしている。

そして、この遠藤氏にたいする自営への引き込み工作は、武田氏に限ったものではなく、この地域の戦国大名のいずれもが画策していたものであったとし、戦国大名は他の戦国大名との交渉の窓口としても、大名勢力の緩衝地帯に存在した国衆を利用したと指摘している。また遠藤氏も、この戦国大名間における役割を自己の存在意義と認識しており、このバランスのうえに、緩衝地帯の国衆は相対的な自立性を保持できていたとする。ここに遠藤氏のような境目に位置し「両属」する国衆としての存在意味があったとする。これは、ある戦国大名が領国の拡大をつよく志向するとき、緩衝地帯に存在していたバランスは崩れることになるが、この渦中に遠山氏一族は、滅亡を余儀なくされていったとする。こうした緩衝地帯の国衆の特質を示した事例の紹介は、戦国期地域の特質を示しており興味深い。

第11章「武田氏の戦争と境目国衆—高天神城小笠原氏を中心に—」では、戦国大名領国の境界に位

置した国衆の動向として、一族・被官が分裂した事例を取り上げている。

武田氏が徳川氏との抗争を展開していくとき、その領国相互の境目は駿河・遠江の国境にあり、ことに高天神城をめぐる戦いが頂点に位置付けられるがここを居城としたのが国衆小笠原氏であり、小笠原氏は永禄12年に徳川氏に服属したが、天正初年に武田氏の攻略を受けて降伏し、このときから先方衆に組み込まれた。先行する研究の成果に拠れば、小笠原氏は城東郡・浅羽庄・山名庄を一円に支配し、その領域にあっては戦国大名と同質の領主権力を行使していた存在で、この領域支配権は武田氏によって認められていた、ともされている。それらをうけて本章では、小笠原氏が武田・徳川両勢力のあいだにあって、いかなる対応をしていったかについて論じている。

すなわち武田勝頼は、天正2年劣勢になっていた駿河・遠江の国境の状況を回復すべく高天神城城を包囲し、武力に頼ることなく降伏させたが、小笠原一族間では、この勝頼の圧力にたいする総領の対応をめぐって離反が引き起こされ、かなりの部分が徳川氏の下に走っていたとする。さらに小笠原氏配下の同心においても、武田・徳川両氏に分かれて服属していったとし、その事例が本間氏をとおして示されている。なかでも勝頼に従った本間氏の一人は、小笠原氏の強い統制下にありながらも武田氏の御家人として扱われていたことが述べられており、一方、徳川氏に従った本間氏についても、家康は同様の扱いをしていたとする。

また武田氏に服属した小笠原氏は、徳川氏との抗争において先陣に立つことが求められ、従来からの領地支配が認められていたが長篠合戦の結果、この地域の勢力関係が大きく変わったことに伴い、小笠原氏には富士郡への転封が強いられていったとする。論者は、この理由として、この時点で小笠原氏のおかれていた存在条件である一族の徳川氏への服属を挙げているが、この転封にさいし、同氏の被官のなかでは随従しなかった者もあったとする。本章は総じて、戦国大名旗下の国衆について論じており、戦国大名の領国境界域に存在した国衆の有り様を明らかにしようとしたものである。こうした国境国衆内部の態様への指摘にも注目しうるものがある。

終章「戦国大名の外交と権力―甲斐武田氏を事例として―」では、武田氏の戦争・外交を伴う大名権力の特徴を整理し、本論文の特徴でもある国衆の動向と戦国大名との関係を相対化し、国衆が大名の戦争に及ぼす影響について検討し、結論としてなぜ戦国大名が戦争・外交を展開しなければならなかったか、領国支配に際してなぜ軍事が必要であったのかという点について展開し、単なる本論のまとめに終始しておらず、「私見」が提示されている。以下その要点を示す。

まず武田氏の軍事・外交については、信虎の時代は内訌を収め甲斐統一を成し遂げ、国衆を服属させ、支配体制を整備していくが、国外からの今川・北条の介入をうけざるをえなかった。しかし今川氏に生じた内訌（花蔵の乱）を契機に逆に今川氏への介入をおこない、同盟を図っていく。また信濃侵攻や扇ヶ谷上杉氏との同盟など国外への対応もおこなった。信虎の時代は、いかに国衆を帰属させ、甲斐を統一して対外勢力と対抗していくかといういわば大名権力構築の段階であった。しかしそこで生じた矛盾が武田氏家中に相互対立を生みだし、その解決が信玄による信虎追放という行為であった。

信玄の時代は、信虎のように対外戦争を断続的にくり返すのではなく、有力大名と協力関係を結ぶことで領国を維持しようとした。つまり頻発した外部との戦争を状況によって回避し、領国を維持す

るとというのが信玄の姿勢であり、そこで重視したのが外交と周辺大名との同盟であったとする。そこで甲駿相三国同盟に注目し、とくに同盟成立と維持に重要な役割を果たした「婚姻」をキーワードに、近年の女性史研究もふまえながら、その実態を明らかにした。

そして三国同盟以降、武田氏の支配領国は拡大し、また外交対象も東国に限らず、石山本願寺・足利義昭・織田信長・徳川家康等、中間地域から畿内へと及んでいったことを段階的に紹介し、ここでは石山本願寺との関係は上杉氏を共通の敵とする軍事同盟であったこと。将軍足利義昭からの要請で織田・本願寺間の和睦仲介を実施するが、それ以前の足利義輝による上杉氏との和睦要請は受け入れないなど、戦国大名としての自立性を構築していた。また信玄は織田信長と同盟したが今川領国侵攻過程で徳川家康と今川領国分割をめぐる齟齬をきたし対立、これを原因に信長とも対立していく。

勝頼の時代は、増大する織田信長との対立が課題であり、勝頼は父信玄の路線を継承し、徳川領国への攻勢を強め、遠江や東三河への侵攻をおこなうが、武田氏の目標は信長との対抗よりも徳川氏と対抗し、傘下にある国衆の帰属を目的とした。

また武田氏は織田信長との対立のもと、本願寺との同盟は継続したが遠隔なために、軍事同盟は十分機能せず、そこで伊勢長島一向一揆との連携をはかったとする。しかし一向一揆の壊滅によって、織田氏の矛先が自らに向けられていく。その危機感は北条氏との同盟維持とも関わってくるが、徳川家康が北条氏と結んだことで領国駿河・遠江を北条・徳川から挟撃されるにいたった。勝頼は信長と和睦を模索するが失敗し、また北条氏が信長に服属を申し入れたことで、武田氏を取り巻く状況はさらに悪化し、すでに天正8年における本願寺の信長降伏もあり、武田氏は孤立化していった。勝頼の外交は、総じて常に織田・徳川両氏を意識したもので、巨大化する両氏の勢力にいかに対抗し、領国を維持していくのかということであり、それは父信玄が没したことで頓挫した路線を、いかに円滑に進めていくかという策を、勝頼は外交で模索した。

また、大名外交に関わる存在として、国衆の存在に注目し、東美濃の遠山氏とその周辺における遠藤氏、遠江高天神城の小笠原氏について検討し、遠山氏は武田・織田同盟に関わり、武田・織田両氏にいわば両属する存在として地域支配をおこなっていたが、両属という性格の故に一方では一族分裂の危機を抱えており、国衆内部に何らかの問題が生ずることで大名の介入がおこなわれ、国衆の領域を奪取あるいは直轄化しようとした。また遠藤氏は斎藤氏から織田氏、そして武田氏も自らのもとへの引き込みを図っており、小笠原氏は武田・徳川両氏の遠江支配をめぐる抗争の只中に位置し、その去就が軍事に影響することでその存在価値は大きく、その措置として武田氏により境目の存在を否定され、「転封」されてしまう。

以上をふまえ、これまで指摘してきた点以外についていくつか指摘すると、大名勢力の接する境目・緩衝地帯における国衆の存在が、地域の平和と安定、また一旦矛盾が惹起すると、境目・緩衝地帯は不安定となり、大名間の同盟破棄にもつながるといふ、大名の外交と深く関わった例を紹介しているが、このことは戦国社会、また戦国大名権力の特質にも関説しており評価される。また戦国大名と国衆は、地方における自立的な支配権力であることには変わらないが、両者の決定的な違いは帰属の有無を武力行使によって求める側であるのか、求められる側であるのかという点にある、との指摘も「戦

国大名の外交」から引き出された論点として興味深い。

こうして戦国大名は、恒常的な戦争状態の中で、将軍・大名・寺院・国衆といったあらゆる勢力と自発的に外交を行うことで、停戦・同盟を模索し、戦況を優位にすべく取りはからったとし、またこうした独自の外交権を有していることも守護大名との違いであるとする指摘も、当該期の地域権力を考える上で興味深い。

その後織田信長と羽柴秀吉の権力が増大するにしたがって、大名は独自の外交を駆使して和睦・同盟することが不可能となっていく。各地の大名が有していた独自の外交権は、信長によって吸収されはじめ、秀吉によって一元化・統一化されたのであるとする。この論点は、近世幕藩制国家のもとで、江戸幕府がいわゆる「鎖国」、すなわち外交権と貿易独占へ続くものとして評価されよう。

そして結論として、戦国大名武田氏は、他大名や国衆と戦争・外交を繰り返すことで、その権力を維持したが、それは室町期守護から戦国大名へと発展した地域国家の支配権力による、独自の政治的手段の典型と位置づけられ、武田氏の滅亡とは、中世から近世へ移行する一つの象徴的な事象で、その後の秀吉による「小田原征伐」もその延長戦上にあつたとした。ここには論者の結論が、明解に示されている。

### III、審査の結果

以上のように、本論文は戦国大名武田氏の外交と権力について、とくに軍事・外交の観点から明らかにしようとしたもので、その過程における研究史の整理と課題の設定、史料収集と批判・分析、叙述と結論の提示、全体の立論構成など論文内容は丁寧かつ適切である。

論文の各章には随所に新知見が紹介され、また結論では自身の研究の体系化を図ろうとする意欲が感じられる。「私見」のより徹底した表現を含め、今後の追加や補筆すべき部分もあるが、新進の研究者の論文として、当該研究に寄与するところは大きい。

これらの諸点をふまえて、審査委員一同は、小笠原春香（学位申請者）が、博士（歴史学）の学位を授与されるに値するものと判断する。